# 出現期の石鏃に関わる新たな資料群の発見とその意義
## －出現期の石鏃の研究（３）－

橋　本　勝　雄

**はじめに**

筆者は、先に関東・中部における旧石器時代終末から縄文時代初頭への移行期の石器研究の一環として、当該期の多様な石器群の中から石鏃を抽出し、出現期における形態変遷の法則性を模索した。具体的には、関東・中部における一括遺物を対象として、主として有舌尖頭器のなごりを留める五角形鏃を重視し、出現期の石鏃の様相を型式学的に検討したのである（橋本2008ａ・2008ｂ・2013・2014ａ・2014ｂ・2016ａ）。

その結果、当該期の石鏃の出現が①縄文草創期後半の爪形文・押圧縄文期であることと、②草創期後半から早期前半の石鏃の母型には三角形と五角形の二つの系列とその中間の折衷形態（五角形鏃Ⅳ類）があり、同時にこの間が石鏃製作の「試行錯誤の段階」であることを確認した（橋本2016ｂ）。

次いでさらなる資料集成の結果、①②に加えて、新たに、③撚糸文末期（Ⅲ期）の遺跡の分布範囲の確定、④「花輪台型五角形鏃」と「堀込型石鏃」を包括した「花輪台型石鏃」や「駿豆五角形鏃」との密接な関係を有する「向ノ原型五角形鏃」を見出し、また同時に、⑤出現期の石鏃の特質には、形態的法則性に加えて、非実用品、及び局部磨製石鏃の三要素があることも指摘した（橋本2018ａ）。

以上の一連の作業を経て、筆者は、出現期の石鏃に関する自らの研究に一区切りがついたとの思いに至った。ところがその後、南陽市北町低湿地遺跡、桐生市小倉丸山砦遺跡、下野市薬師寺稲荷台遺跡、小千谷市元中子遺跡、下呂市上ヶ平遺跡、高野安夫氏コレクション等幾多の重要な資料に遭遇したため再検討を余儀なくされた。この中では特に、薬師寺稲荷台遺跡と小倉丸山砦遺跡が双璧であり、実見の結果、それぞれ爪形文期と押圧縄文期の代表例であるとの認識が深まった。

このような現状をふまえて、本稿では二つの良好な資料をもとに前稿の内容の拡充を図り、併せて、その他の隠れた資料にも光を当てる作業に努めたい。

**１　二つの資料ー薬師寺稲荷台遺跡と小倉丸山砦遺跡ー**（第１図、第１・２表）

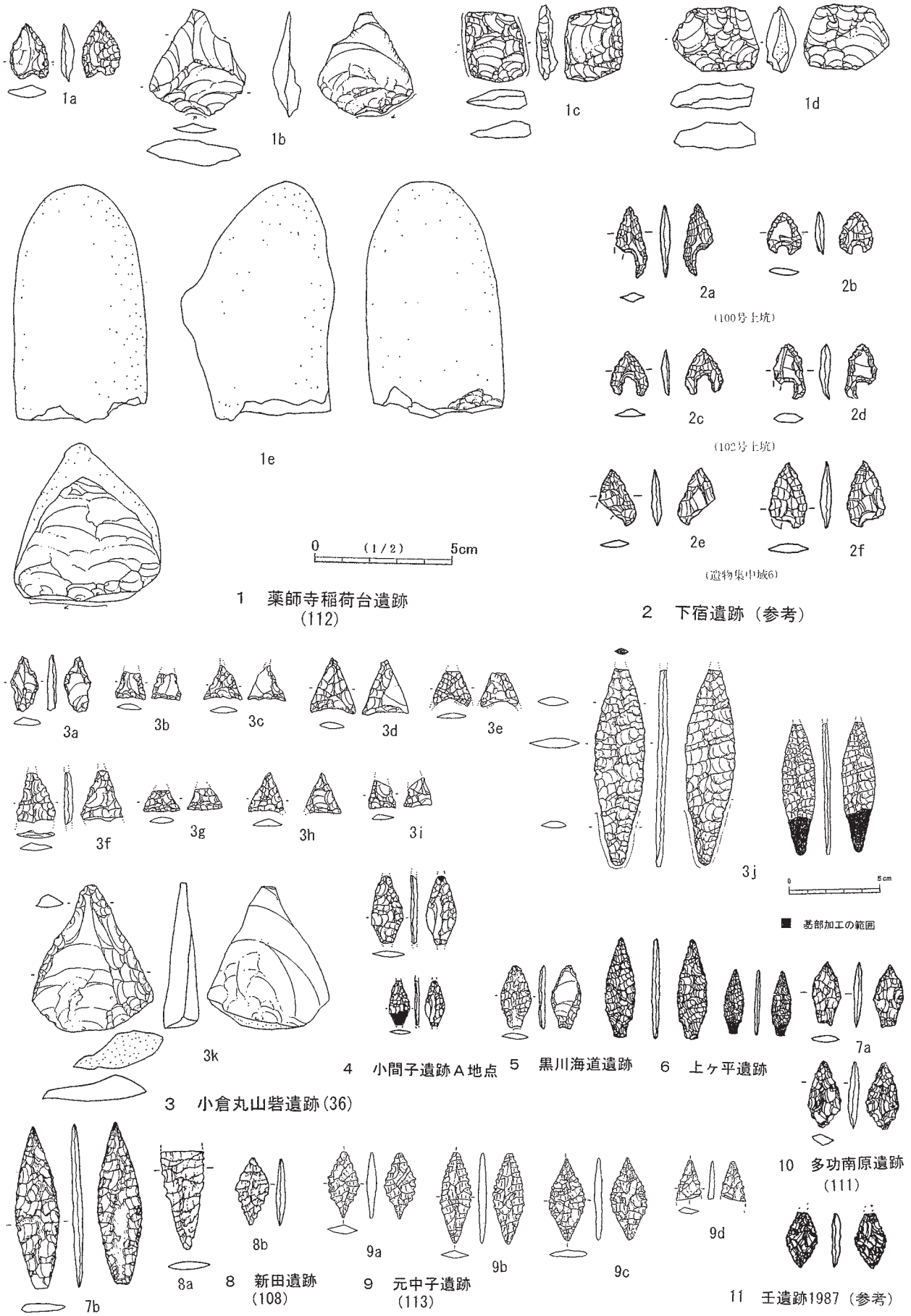
前述のように、両者は一括性が高く草創期後半（爪形文・押圧縄文期）の資料の白眉といえる。この度、地元教育委員会の特段のご配慮により実測及び公表の機会をいただいた。まずは、それぞれの調査所見をここに記し識者の参考に供することとしたい。

**（１）薬師寺稲荷台遺跡**（とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター2009、国立歴史民俗博物館2009、江原・大野2012）　所在地：栃木県下野市薬師寺字稲荷台、調査期間：平成19（2007）年10月18日～12月7日。

**１）分布・立地**　本遺跡は栃木県南部の中央部低地に所在し、姿川・思川水系と鬼怒川・田川水系に挟まれた宝木台地に立地する。本遺跡が位置するのは台地の東側斜面で、ここは田川によって形成された沖積低地の崖線部にあたり標高は約60ｍを測る。

この付近は栃木県内でも有数の遺跡の密集地であり、本遺跡の西にも大規模な「自治医科大学周辺地区」（約60ha）が隣接する。また、当該期の遺跡としては、田川をはさみ北東約7㎞に上三川町大町遺跡があり爪形文土器の破片が７点、さらに、その北方約５㎞に位置し同一台地上にある同磯岡遺跡でも爪形文土器の破片が１点出土している（秋元1985、津野・塚本2005）。ただし、これらはいずれも採集品であり一括性に欠ける点が惜しまれる。

**２）出土状況**　発掘調査によって縄文時代草創期後半の土坑が３基検出され爪形文土器（３個体程度）をはじめ、少量の石器が出土している。しかしながら、遺物の出土は第一号土坑（円形・径約1.5m、深さ約40cm）に限られ、かつその南半分が後世の溝により破壊されていた。この土坑は完形品の土器や石器の埋納から墓壙と推定されており、$^{14}$Ｃによる年代測定により、11,170±50、10,750±5014$^{14}$ＣBPという二つの測定値が提示されている。




**第１図　縄文時代草創期後半の石鏃の主要例と追加資料**　※括弧内は第３図の遺跡番号

**第１表　下野市薬師寺稲荷台遺跡出土石器一覧**

| 整理番号 | 挿図番号 | 遺物番号 | 器　種 | 石　材 | 母　岩 | 法　量（cm/g） | | | | 素　材 | 欠損状況 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | | | |
| 1 | 1b | SIYT　SK-1 | 石鏃未成品 | 流紋岩 | 単独 | 3.7 | 3.5 | 0.8 | 7.16 | 剥片 | | 基部のみ加工 |
| 2 | | SIYT　SK-1 | 剥片 | チャート | 単独 | 1.9 | 1.8 | 0.3 | 0.79 | | 打面ハジケ | 両極剥片 |
| 3 | 1a | SIYT　SK-1 | 石鏃未成品 | チャート | 単独 | 2 | 1.4 | 0.4 | 1.06 | 剥片 | | 凹基無茎族 |
| 4 | | SIYT　SK-1 | 剥片 | 碧玉 | 単独 | 1.7 | 3.4 | 0.4 | 1.86 | | 端部 | |
| 5 | | SIYT　SK-1 | 楔形石器 | 流紋岩 | A | 3.7 | 2 | 1.3 | 8.59 | 剥片 | | |
| 6 | | SIYT　SK-1 | 石核 | 流紋岩 | A | 3.6 | 4.8 | 2.6 | 38.30 | 礫 | 端部片 | |
| 7 | | SIYT　SK-1 | 剥片 | 流紋岩 | B | 2.8 | 4.1 | 1.8 | 17.46 | | | 接合（№10） |
| 8 | 1c | SIYT　SK-1 | 楔形石器 | 流紋岩 | A | 2.6 | 2.1 | 0.7 | 4.03 | 剥片 | | 薄手（石鏃未成品？） |
| 9 | | SIYT　SK-1 | 剥片 | 流紋岩 | A | 2.1 | 3.4 | 0.8 | 5.76 | | 端部片 | |
| 10 | | SIYT　SK-1 | 石核 | 流紋岩 | B | 5.2 | 5.8 | 4 | 115.39 | 礫 | | 接合（№7） |
| 11 | 1d | SIYT　SK-1 | 楔形石器 | 流紋岩 | A | 2.3 | 3.1 | 0.9 | 7.73 | 剥片 | | |
| 12 | 1e | SIYT　SK-1 | スタンプ形石器 | 安山岩 | 単独 | 8.5 | 4.9 | 5.6 | 304.00 | 礫 | | 一端に平坦面作出 |
| 13 | | A（仮番号） | 剥片 | 流紋岩 | 単独 | 1.9 | 1.9 | 0.4 | 1.87 | | 端部 | 両極剥片 |
| 14 | | B（仮番号） | 剥片 | 流紋岩 | 単独 | 2.5 | 2 | 0.5 | 1.61 | | 端部 | |
| 15 | | C（仮番号） | 剥片 | 流紋岩 | A | 2.6 | 1.9 | 0.5 | 1.98 | | | |
| 16 | | D（仮番号） | 剥片 | 流紋岩 | A | 1.4 | 1.4 | 0.5 | 1.02 | | | |
| 17 | | E（仮番号） | 剥片 | 流紋岩 | A | 1.5 | 1.4 | 0.3 | 0.42 | | 端部片 | 両極剥片 |
| 18 | | F（仮番号） | 剥片 | 流紋岩 | A | 1.0 | 1.2 | 0.2 | 0.25 | | 端部片 | 両極剥片 |
| 19 | | G（仮番号） | 剥片 | 流紋岩 | A | 1.5 | 0.9 | 0.7 | 0.74 | | | |
| 20 | | H（仮番号） | 砕片 | 流紋岩 | A | 0.7 | 1.1 | 0.2 | 0.12 | | | |
| 21 | | I（仮番号） | 剥片 | 流紋岩 | A | 1.1 | 0.5 | 0.3 | 0.17 | | | |
| 22 | | J（仮番号） | 剥片 | 緑色凝灰岩 | 単独 | 1.7 | 0.6 | 0.3 | 0.25 | | 端部 | 両極剥片 |
| 23 | | K（仮番号） | 剥片 | 安山岩 | C | 1.2 | 1.4 | 0.6 | 1.01 | | 端部 | |
| 24 | | L（仮番号） | 剥片 | 安山岩 | C | 1.1 | 2.4 | 0.6 | 0.98 | | | |

**第２表　桐生市小倉丸山砦遺跡出土剥片石器一覧**

| 整理番号 | 挿図番号 | 遺物番号 | 器　種 | 石　材 | 法　量（cm/g） | | | | 基部 | 欠損状況 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | | | |
| 1 | 3j | 2区S-52(F) | 木葉形薄型尖頭器 | 硬質頁岩 | 7.1 | 1.8 | 0.4 | 4.87 | 円基 | 先端ガジリ | 基部再加工 |
| 2 | 3a | 2区0A6(F) | 五角形鏃 | 黒曜石（信州系） | 2 | 1 | 0.3 | 0.58 | 円基 | | 周辺加工 |
| 3 | 3b | 2区東セクション南側一括 | 石鏃 | チャート | 1 | 1.1 | 0.2 | 0.26 | 凹基 | 先端 | |
| 4 | 3c | 2区東セクション南側一括 | 石鏃 | チャート | 1.3 | 1.5 | 0.2 | 0.30 | 凹基 | | |
| 5 | 3d | 2区3A -3(D)一括 | 石鏃 | ガラス質黒色安山岩 | 2 | 1.6 | 0.3 | 0.56 | 凹基 | | |
| 6 | 3e | 2区3A -3(D)一括 | 石鏃 | 黒曜石 | 1.3 | 1.3 | 0.2 | 0.25 | 凹基 | 先端ガジリ | |
| 7 | 3f | 2区0A-3（F） | 石鏃 | 黒曜石 | 1.8 | 1.4 | 0.4 | 0.67 | 不明 | 端部破片 | |
| 8 | 3g | 2区3A -3(F) | 石鏃 | チャート | 0.7 | 1.3 | 0.2 | 0.19 | 平基 | 先端 | |
| 9 | 3h | 2区3A-3（D）一括 | 石鏃 | チャート | 1.4 | 1.2 | 0.3 | 0.36 | 凹基 | | |
| 10 | 3i | 2区3A-3（D） | 石鏃 | チャート | 1 | 0.9 | 0.2 | 0.16 | 凹基 | 先端ガジリ | |
| 11 | 3k | 2区S-185（D） | 石錐 | 黒色頁岩 | 5.1 | 4.3 | 1.2 | 18.5 | | | |

### ３）出土石器

**石器の特徴**　石器は計24点出土している。内訳は石鏃未成品２点、楔形石器３点、スタンプ形石器１点、剥片15点、砕片１点、石核２点となっている。

石鏃未成品としたもののうち、１ａについては完成品として実用に供された可能性も否めないが、基部の抉りが浅く、粗雑な造りであることから、ここでは円脚鏃の母型と捉えた。全体の形状は図示したように下宿例の一部（第１図２）に酷似している。一方、１ｂには幅広な剥片の打面部に抉り込みがみられ、製作の初期段階に属する。楔形石器（１ｃ・１ｄ）はいずれも薄手扁平で、石鏃の未成品の可能性がある。スタンプ形石器（１ｅ）は小型の棒状礫を素材として一端に平坦面が作出されている。使用により一側辺が部分的に摩耗している。

**石器石材**　石材は流紋岩17点、安山岩３点、チャート２点、碧玉・緑色凝灰岩各１点となっており、基本的に在地石材で占められている。このうち安山岩と緑色凝灰岩は礫石器、他は剥片石器の製作に伴うものと考えられる。

**４）資料の意義**　本遺跡の出土遺物は関東地方では稀有な爪形文期の一括資料である。類例としては、群馬県内の太田市下宿遺跡（中村2012）、みどり市西鹿田中島遺跡（若月・小菅・萩谷2003、萩谷ほか2017））があるが、土坑内出土という意味では、特に前者とのつながりが深い。石器群については、数量はさほど多くはないが、円脚鏃とスタンプ形石器の出土が注目される。特に、スタンプ形石器は、これまで撚糸文前半の夏島式期を最古として稲荷台式以降の撚糸文期後半に盛行した（小田1983、石坂・岩崎1988）といわれてきたが、本例は、後述の小倉丸山砦遺跡とともに、早期前半をさらにさかのぼるものとして、今後の当該資料の研究に与える影響は大きい。

**（２）小倉丸山砦遺跡**（加部・新井2016）　所在地：群馬県桐生市川内町一丁目31-1、調査期間：平成25年11月11日～12月6日。

**１）分布・立地**　本遺跡は中世末の砦跡として知られている。群馬県南部を流れる渡良瀬川左岸、標高約140ｍの河岸段丘上に位置し、西に渡良瀬川支流の小倉川（比高約７ｍ）を望む。近隣の押圧縄文期の遺跡

としては、南西約５kmにこの地域の中核をなすみどり市西鹿田中島遺跡（若月・小菅・萩谷2003、萩谷ほか2017））、さらに南西約12kmには伊勢崎市三室坊主林遺跡（原1989）と同神谷遺跡（中東1985・1986）が所在するが、渡良瀬川流域に限れば、今のところ唯一の遺跡といっても差し支えない。なお、時期はやや異なるが南東約15kmに、爪形文期の太田市下宿遺跡（中村2012）が所在することをつけ加えておく。

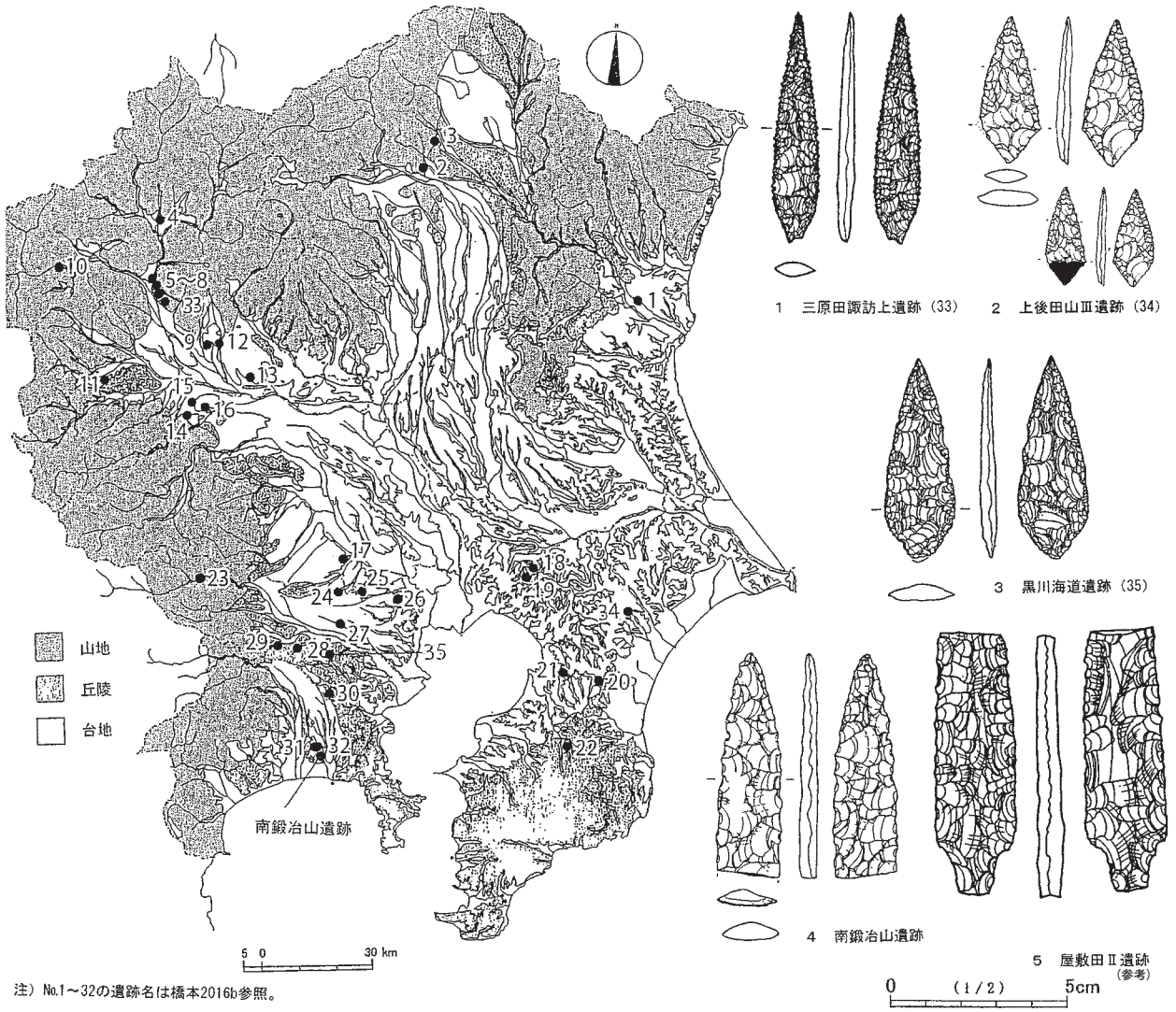
**２）出土状況**　宅地造成工事に伴う範囲確認調査の結果、遺構は「中世末のピット数十基」と「縄文時代草創期後半及び早期の遺物を包含する地すべり状の落ち込みが２箇所」、遺物は「縄文時代草創期後半の多縄文系土器が1000点以上、縄文時代早期前半の土器（井草式）が数十点」と「有舌尖頭器１点、石鏃７点以上、礫器・剥片石器・石皿・磨石が数十点」が発見された。これらの中では、縄文時代草創期後半の資料群が主体といわれている。草創期後半と縄文早期の遺物は層位的に分離可能であり、かつ縄文時代草創期については、遺物がパックされた状態で検出され一括性が高い。なお、土器は遺存度が高く中には尖底もみられる。

**３）出土石器**

**石器の特徴**　石器は礫石器と剥片石器で構成されている。礫石器については、そのすべてを把握しておらず暫定値であるが、少なくとも磨石類（一部に凹み痕を伴う）４点、石皿（作業面は平坦）１点、礫器（片刃）６点のほかに、スタンプ形石器が１点ある。スタンプ形石器は棒状礫を素材としており、その端部に平坦面を作出している。先述したとおり薬師寺稲荷台例と同形であり、当該器種としては最古の部類に属する。

剥片石器は剥片類・石核を主としており、これに若干の利器が加わる。利器は計11点(木葉形薄型尖頭器・石錐各1点、石鏃９点）を数えほぼこれがすべてと考えられる。これらについては全点実測を行った。

石鏃は五角形鏃１点、三角形鏃８点となっている。五角形鏃（３ａ）は、菱形に近い形態を有する。素材は幅広な横長剥片である。背面側には全周にわたって




注）No.1～32の遺跡名は橋本2016b参照。

**第２図　関東の黒曜石製有舌尖頭器（橋本2016bを一部改変）・下呂石製有舌尖頭器　※括弧内は遺跡番号**

急角度で細かな剥離面、腹側の上部にはやや平坦な剥離面が局所的にみられる。加工が粗雑なことから未成品の可能性も残されている。石材は半透明の黒曜石（信州系）である。三角形鏃（３ｂ～３ｉ）は、概して小型で扁平である。完形品は2点にとどまり欠損率が高い。木葉形薄型尖頭器（報文「有舌尖頭器」）（３ｊ）は薄造りで尖基。表裏とも精緻な平行剥離がみられ、特に裏面に顕著である。基部付近には一段と細かな加工が施され、かつ磨耗痕がみられる。先端部は欠損しているがガジリによる新たな損傷であり、本来は完形であったものと推定される。石材は硬質頁岩（東北頁岩）である。石錐（３ｋ）は、自然面を打面とした横長剥片を素材としており片面（周辺）加工となっている。ただし、先端部がさほど尖鋭ではなく尖頭状削器の可能性も残されている。

**石器石材**　剥片類を含めた剥片石器の石材は黒曜石（肉眼視では信州系）、チャートが二大石材となっている。このほかには、少量のガラス質黒色安山岩、黒色頁岩、石英、ホルンフェルスがある。一方、礫石器の石材は磨石類と石皿が粗粒の安山岩（多孔質安山岩を含む）を主としているのに対して、礫器にはホルンフェルス（５点）と黒色頁岩（２点）が用いられており、器種に応じた石材の使い分けが顕著である。

**４）資料の意義**　本遺跡の出土遺物は押圧縄文期の良好な一括資料である。関東の類例としては、このほかに群馬県みどり市西鹿田中島遺跡（若月・小菅・萩谷2003、萩谷ほか2017））・伊勢崎市五目牛新田遺跡（及川2005）、埼玉県比企郡滑川町打越遺跡（及川2006）、東京都日野市七ツ塚遺跡（篠崎ほか2004）・同練馬区もみじ山遺跡（荻澤ほか1995）、千葉県富津市前三舟台遺跡（佐伯・小笠原1992）等がある。石器群の中では、石鏃関連の木葉形薄型尖頭器と菱形・円基鏃が特に注目される。両者の同時性の検証もさることながら、同形の木葉形薄型尖頭器は、新潟県壬遺跡の採集資料（宮尾2013）、青森県中津軽郡西目屋村鬼川辺（１）遺跡（能代谷･浅田2014）、北海道帯広市大正３遺跡（北沢ほか2006）など、関東にとどまらず北方に大きな広がりをみせており、当該期の石器の系譜をたどる上で大きな意味をもっている[1)]。

## ２　関連資料－縄文時代草創期～早期前半－

次に以上のような一括資料ではないが、新たに出現期の石鏃に関する資料を見出したので、時間軸に沿って順次これらを紹介しよう。

なお、黒曜石製有舌尖頭器、木葉形薄型尖頭器、「向ノ原型五角形鏃」の発見に関しては、千葉県匝瑳市在住の高野安夫氏の功績が大きい。

### （１）縄文時代草創期前半（第２図）

◆信州系黒曜石製有舌尖頭器（第２図１～３）

前稿で述べたように、出現期の石鏃に直接的な技術形態学的影響を与えたものとして信州系黒曜石を基本石材とする有舌尖頭器がある（橋本2016b）。

今回の追加資料は、群馬県渋川市三原田諏訪上遺跡（小林・日沖2004）、千葉県山武市上後田山Ⅲ遺跡（未報告）、神奈川県川崎市黒川海道遺跡（村田・増子1978）である。

三原田諏訪上例（長さ6.5㎝・幅1.4㎝・厚さ0.5㎝・重さ3.14ｇ）は、発掘調査によって遺構外から出土した。二側縁が鋸歯縁を呈し基部が欠損している。石材は無色透明で黒斑を含む信州系黒曜石である。上後田山Ⅲ例（長さ4.2cm・幅1.8cm・厚さ0.5cm・重さ2.40ｇ）は高野安夫氏による採集品である。正面の舌部左端が一部欠損しているがほぼ完形である。正面の舌部（黒塗り）を残しそれ以外の部位には再加工がなされている。そのため器体はやや寸詰まり気味である。側縁は鋸歯状であり石材には無色透明の信州系黒曜石が用いられている。黒川海道例（長さ5.7㎝・幅2.0㎝・厚さ0.4㎝・重さ4.24ｇ）も採集品（川崎俊氏）である（報文「尖頭器」）。基部と一側縁が欠損しているが、ガジリによるもので本来は完形であったと推察される。この資料も石材は無色透明の信州系黒曜石である。

黒曜石製有舌尖頭器は、関東西部で散発的に出土しており、その関連遺跡は以上の資料を含め都合38例を数える。この有舌尖頭器の石材、技術・形態学的な特徴は、関東・中部の信州系黒曜石製の五角形鏃Ⅰ～Ⅲ類（「菱形・円基鏃」）の形態・技術（押圧剥離・鋸歯状縁）・石材（信州系黒曜石）によく反映されており、その基本属性が、出現期の石鏃にスムーズに継承されたことが理解される。また、分布域にも互いに相関性がみられる。さらに信州系黒曜石製有舌尖頭器は、外来的性格を有しており、関東・中部における地域間の対比を図る上で有効な資料といえる。

見方を変えれば、このような信州系黒曜石製の利器の流入は、次期の草創期後半の寒冷化（「寒の戻り」）の兆しとも捉えられる。したがって、当該資料は、有舌尖頭器から石鏃への移行の様態を探る上で好適な条件を備えており、その限りにおいては、少量ながらそれらの資料的価値は、併存関係にある在地の花見山型

に優る、と言っても過言ではない（橋本2016b）。

◆下呂石製有舌尖頭器（第２図４・５）

さて、信州系黒曜石製有舌尖頭器と同様に外来的な性格を帯びているものとして、今回、下呂石製有舌尖頭器を新たに見出した。太平洋側の神奈川県藤沢市南鍛冶山遺跡（桜井ほか1994）と日本海側の新潟県中魚沼郡津南町屋敷田Ⅱ遺跡の出土資料（佐藤ほか1995）がこれに該当する。両者は互いに地域を異にするものの、ともに下呂石製石器の分布の外縁に位置している点が興味深い。

南鍛冶山例（長さ6.3cm・幅1.8cm・厚さ0.5cm・重さ5.6ｇ）は、発掘調査により遺構外から出土した。基部が欠損しているためか報文では「尖頭器」とされていたが、精緻な加工と薄手扁平の造りから有舌尖頭器の欠損品と推定される。このことについては確実な有舌尖頭器である屋敷田Ⅱ遺跡の出土例（長さ7.4cm・幅2.3cm・厚さ0.7cm）との技術的特徴や形態・大きさ（特に胴部の幅・厚さ）の重なりからも補強される。なお、関東では下呂石製石器は希であり、類例としては、今のところ千葉市六通神社南遺跡の尖頭器が唯一である（相京ほか2003）[2)]。

**（２）縄文時代草創期後半**（第３～５図）

まず、古段階の爪形文・押圧縄文期には五角形鏃（「菱形・円基鏃」、円脚鏃、五角形鏃Ⅳ類）・三角形鏃と木葉形薄型尖頭器が登場する。次の表裏(回転)縄文期の石鏃には五角形鏃Ⅳa類と三角形鏃（凹基・平基）があるが、追加資料は特に見受けられない。当該期の資料は、もともと一括資料が少なく、数量的な保証もない。特に関東地方の資料が乏しい。ついては、前稿と同様に「局部磨製石鏃の製作と信州系黒曜石の重用の傾向」を指摘するにとどめておく。

**１）資料の紹介**　先の二例を除いた追加資料を以下に掲げる。

このなかで円脚鏃については爪形文土器、菱形・円基鏃・木葉形薄型尖頭器については押圧縄文土器との関わりが深いことは言うまでもない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

①木葉形薄型尖頭器

千葉県八街市小間子遺跡Ａ地点（未報告）、神奈川県川崎市黒川海道遺跡（村田・増子1978）、岐阜県下呂市上ヶ平遺跡（八賀ほか2002）・同中津川市新田遺跡（紅村1963）、山形県南陽市北町低湿地遺跡（長井ほか2019）。

②菱形・円基鏃

岐阜県中津川市新田遺跡（紅村1963）、新潟県小千谷市元中

**第３図　縄文時代草創期後半の石鏃関連遺跡分布図**
**（橋本2018aを一部改変）　※木葉形薄型尖頭器は別途**

子遺跡（安達ほか1999）、栃木県河内郡上三川町多功南原遺跡（山口1999）、新潟県十日町市壬遺跡1987（小林1987）。

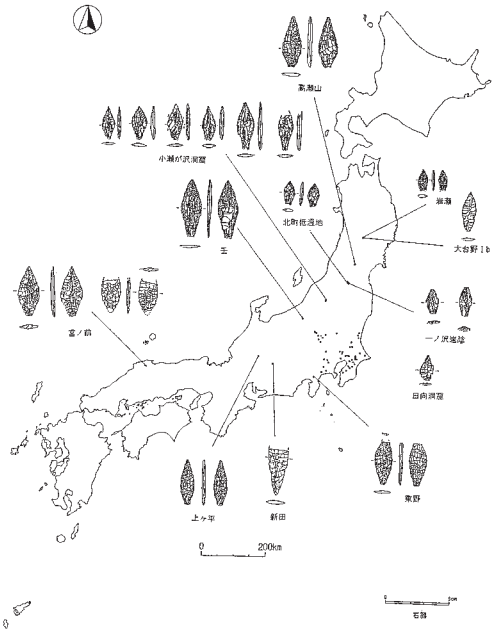
③円脚鏃

山形県南陽市北町低湿地遺跡。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

①木葉形薄型尖頭器

小間子遺跡Ａ地点の出土例（長さ2.6cm・幅1.2cm・厚さ0.3cm・重さ0.76ｇ）は高野安夫氏による採集品である。薄手の剥片（裏面に剥片の主要剥離面残置）を素材としており加工は精緻である。表面の基部には再加工（黒塗り）が施され、火ハネにより上下両端が欠損している。石材は東北頁岩である。黒川海道遺跡の出土例（長さ2.3cm・幅1.1cm・厚さ0.2cm・重さ0.52ｇ）は川崎俊氏の採集品であり、報文では「有舌尖頭器」とされていた。完形品で平面形は菱形で凹基、断面は薄い凸レンズ状である。素材は剥片（裏面に主要剥離面残置）で押圧剥離により全体を整形した後、正面中央部が研磨されている。石材はチョコレート色の東北頁岩（報文「チャート」）である。上ヶ平遺跡の資料（長さ3.6cm・幅1.0cm・厚さ0.3cm・重さ6.87ｇ）も小間子Ａと同様に基部に再加工が施された例である。ほぼ完形であるが下端部の一部が火ハネにより損傷してい

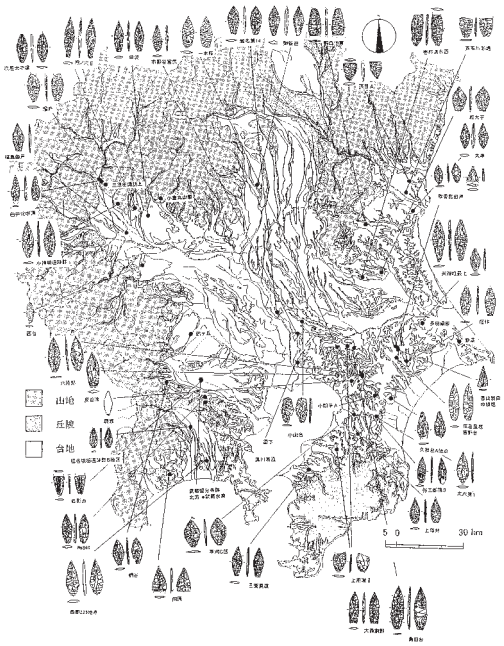



**第４図　木葉形薄型尖頭器の遺跡分布**
**（全国）（橋本2018aを一部改変）**

る点が惜しまれる。石材は東北頁岩である。上ヶ平は下呂石の原産地遺跡であり、東北地方と近畿・中国地方とをつなぐ中部高地の要衝に位置する。新田遺跡も上ヶ平遺跡とほぼ同様の地理的位置にある。出土資料（８ａ）については先端部が欠損しており尖基で器面には微弱な研磨痕が観察される。石材は黄白色の東北頁岩であり、大きさは長さ3.4cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ1.7ｇを測る。同一石材のものとしては、分布圏の南限に位置する島根県松江市宮の前遺跡の出土例（柳浦ほか2006）（第４図）が代表例といえる。このほか、北町低湿地遺跡の出土例（長井ほか2019･2020）（７ａ・７ｂ）については、数少ない東北地方の出土例として希少価値が高い。７ａは秋田県横手市岩瀬例（利部・谷地1996）と同形、７ｂは東北初の局部磨製の資料であり、類例は関東地方で数多くみられる。このほか円脚鏃も共存しており、両者の同時性を検証する意味で注目される。

②菱形・円基鏃

前出の新田遺跡では菱形鏃（８ｂ）も採集されている。完形品で鋸歯縁が特徴的である。残念なことに石材や由来等の詳細は不明である。元中子遺跡の出土資料は、一括性が高く、押圧縄文土器が共存している。いずれも鋸歯縁が作出された菱形鏃（９ａ：完形品・長さ2.4cm・幅1.2cm・厚さ0.4cm・重さ0.61ｇ・流紋岩製、９ｂ：完形品・長さ3.4cm・幅1.2cm・厚さ0.3cm・重さ0.77g・珪質頁岩製（報文：「安山岩」）、９ｃ：完形品・長さ3.0cm・幅1.4cm・厚さ0.3cm・重さ0.78cm・珪質頁岩製、９ｄ：先端部破片・長さ1.5cm・幅




**第５図　木葉形薄型尖頭器の遺跡分布（関東）**
**（橋本2018aを一部改変）**

0.9cm・厚さ0.3cm・重さ0.24g・チャート製）である。多功南原遺跡の菱形鏃（長さ2.5cm・幅1.3cm・厚さ0.3cm・重さ0.76ｇ）は完形品で石材は信州系黒曜石（黒縞）が用いられている。

このほか新出ではないが、壬遺跡1987の石鏃（長さ1.9cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm、重さ0.54ｇ・信州系黒曜石製（黒縞））を再度紹介しておく。当該資料については先に行った実見の結果、報文とは異なり上下関係が逆であり、先端部がガジリにより欠損していることが判明した。資料の重要性に鑑みここに所見を付し参考に供することとした。

**２）資料の評価**　およそ爪形文・押圧縄文期には、三角形鏃は東北地方から九州地方に至るまで、ごく一般的にみられるが、五角形鏃の関連遺跡は、東北南部（一ノ沢岩陰）から近畿方面（桐山和田・相谷熊原・鳥浜貝塚）にかけて局所的に分布（東西約600km）し、特に関東地方に集中している。この五角形鏃関連の石材別の遺跡分布からは、信州系黒曜石（関東・中部・北陸方面の諸例）、下呂石（椛ノ湖遺跡･相谷熊原遺跡等）、サヌカイト（桐山和田遺跡）などの原産地を中心として、局所的な物流のネットワークも想定される。おそらく信州系黒曜石を基調とした菱型・円基鏃が関東西南部に偏在する現象は、その一環なのであろう。

以上の石鏃のうち、五角形鏃（Ⅰ～Ⅲ類）と木葉形薄型尖頭器については、明確に有舌尖頭器の形態的イメージ（なごり）と鋸歯状縁をとどめている。ただし、木葉形薄型尖頭器は 薄造りで局部磨製・東北頁岩製を基本とした非実用品であり、通常の石鏃とは一線を

画している。搬入形態が製品であり、分布域は北は秋田県岩瀬遺跡から南は島根県宮の前遺跡に至るまで広範囲（東西約800km）に及ぶ。特に関東地方に遺跡が稠密であり、今回の資料を合算すると、都合58か所（計69点）を数える。いずれも遺構外出土であり単独出土を基本とする。用材については在地系のチャート製もあるが、基本的には遠隔地系の東北頁岩製である。技術的には時として研磨され、薄造りであるのもかかわらず欠損率が低い。

**（3）早期前半ー撚糸文土器と石鏃ー**（第６図～第８図）

前稿でも述べたように、早期前半の撚糸文期を宮崎朝雄の見解に準拠して三つに区分し一括遺物を検討すると、撚糸文Ⅰ・Ⅱ期には石鏃の絶対数が少なく、同時に五角形鏃（Ⅰ～Ⅲ類）も潜在化している[3)]。

これに対して、撚糸文Ⅲ期には石鏃の出土例が急増し、この段階になって再び五角形と三角形の二つの系列が顕在化する。冒頭でも記したように筆者はこれらを「花輪台型石鏃」と総称している（橋本2018ａ）。

一方、撚糸文Ⅲ期と相前後して、押型文土器が登場した。押型文期の石鏃は、基本的に三角形鏃と鍬形鏃であるが、関東ではこれに「向ノ原型五角形鏃」が加わる。

**１）資料の紹介**　以上の石鏃型式のうち、今回追加紹介する資料は以下のとおりである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

①花輪台型石鏃（撚糸文Ⅲ期）　千葉県船橋市小室台遺跡（小中ほか2015）、同大網白里市宮台遺跡（山口1989）、栃木県河内郡上三川町多功南原遺跡（山口1999）、茨城県小美玉市館山遺跡（小玉・本田1999）、同稲敷郡阿見町ナギ山遺跡（栗田2007）・同笠間市向原遺跡（石川・早川2007）・同桜川市辰海道遺跡（仲村2004）。

②向ノ原型五角形鏃（押型文期）　千葉県千葉市六通神社南遺跡（相京ほか2003）、・同（仮称）向山西遺跡（未報告）、同八街市大清水Ⅱ遺跡（未報告）、同成田市一坪田入遺跡（未報告）。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

①「花輪台型石鏃」（第７図）

いずれも花輪台型五角形鏃のⅣ類（いわゆる「堀込型石鏃」）であり、石材はチャートを主体としている。また、遺構外出土のため一括性に欠ける。

小室台遺跡（長さ2.4cm・幅1.4cm・厚さ0.5cm・重さ1.55ｇ）と宮台遺跡（長さ3.5cm・幅1.7cm・厚さ0.4cm・重さ1.68g））の出土例は、ともにチャート製である。前者は両面磨製となっている。多功南原遺跡では4点出土している。いずれも完形品であり、石材の内訳は

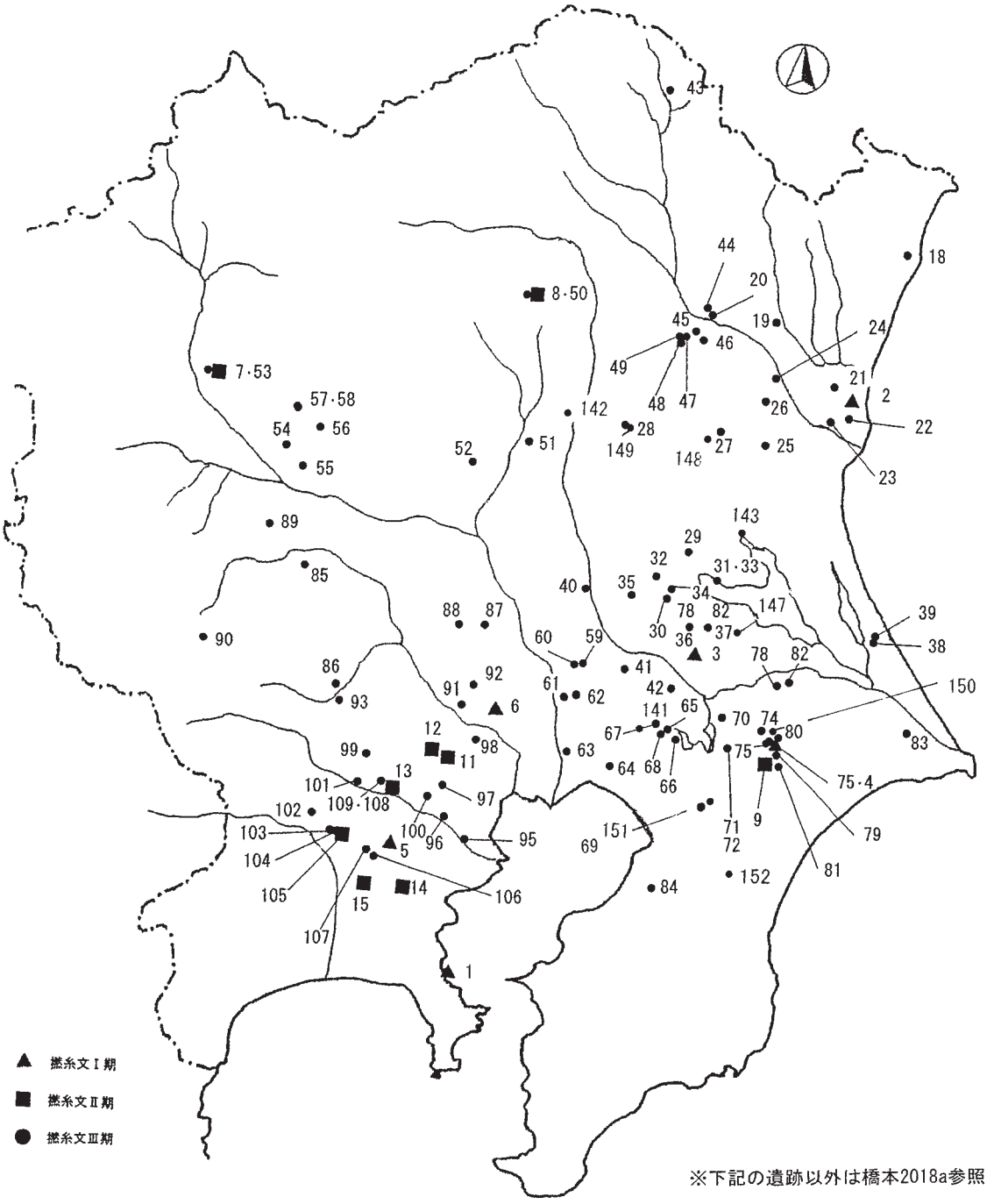
**第６図　撚糸文Ⅲ期の関連遺跡分布圏（全体）**
**（橋本2018aを一部改変）**

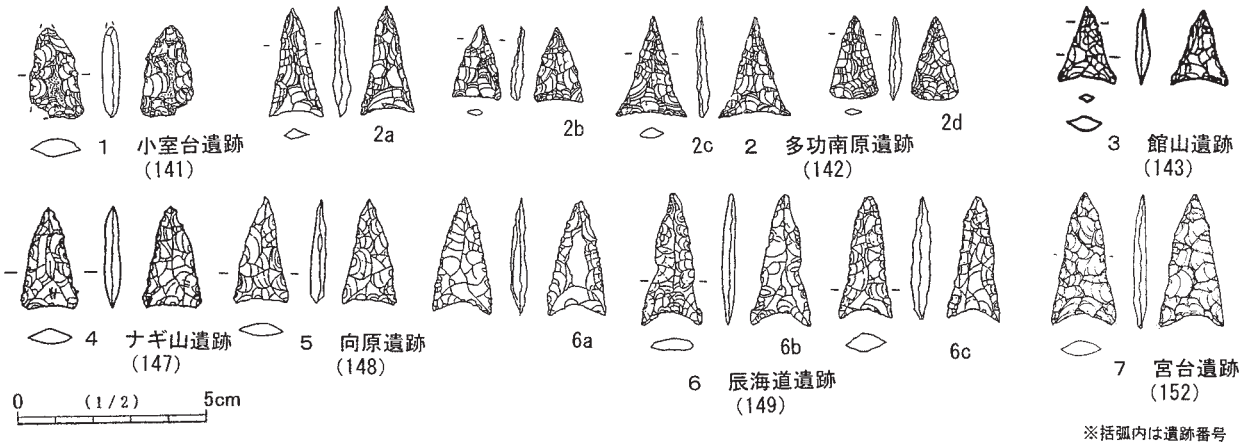
チャート３点と珪質頁岩1点となっている。茨城県下では辰海道遺跡の４点（石材：チャート２点、硬質頁岩・頁岩各1点）を筆頭に、館山遺跡（長さ2.0cm・幅1.5cm・厚さ0.4cm・重さ0.7ｇ・チャート製）、ナギ山遺跡（長さ2.7cm・幅1.6cm・厚さ0.4cm・チャート製）、向原遺跡（長さ2.8cm・幅1.5cm・厚さ0.4cm・チャート製）から各1点出土している。このほか図示しなかったが千葉県成田市一坪田入遺跡（第７図150）でも五角形鏃の関連資料が出土している模様である。

②「向ノ原型五角形鏃」（第８図）

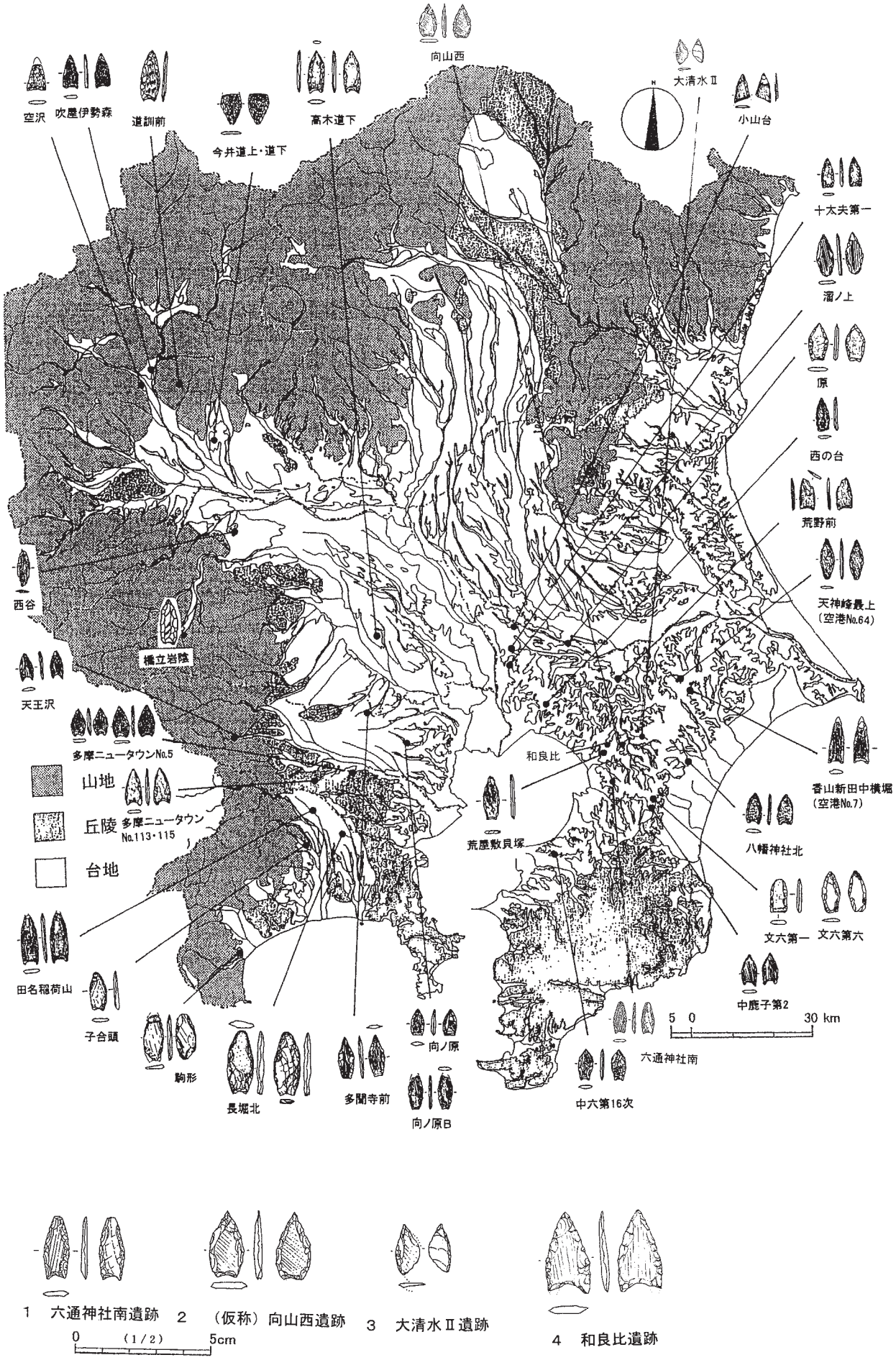
「向ノ原型五角形鏃」には、①平面形は五角形で薄手・扁平、②石材は脆弱な石材が主体（粘板岩19点、凝灰岩６点、砂岩４点、頁岩４点、珪質頁岩２点、デイサイト・ホルンフェルス各1点）、③脆弱で薄造りにもかかわらず破損率が低い、④平滑な研磨面には線状痕が顕著（砥石の使用）、⑤欠損率は約30％で比較的低率（先端部欠損９点、上下両端欠損１点、先端部破片３点　完形品28点）という特徴がある。これらの一連の要素はさしずめ非実用品としての機能を反映していよう。今回の追加資料は４点であり、このうち２点（向山西遺跡（仮称）、大清水Ⅱ遺跡）は高野安夫氏による採集品であり、六通神社南例のほかは粘板岩製となっている。

六通神社南遺跡の出土例（長さ2.3cm・幅0.9cm・厚




第７図　縄文時代早期前半（撚糸文期）の石鏃関連遺跡と追加資料（関東）（橋本2018aを一部改変）




第８図 「向ノ原型五角形鏃」の遺跡分布図と追加資料（橋本2018aを一部改変）

さ0.2㎝・重さ0.6ｇ）は、この型式には珍しい衝撃剥離（縦溝状剥離）が先端部に観察される。石材は頁岩である。向山西遺跡は未周知の遺跡である。当該資料は完形品であり、大きさは長さ2.6㎝・幅1.3㎝・厚さ0.3㎝・重さ0.93ｇを測る。大清水Ⅱ遺跡の資料は先端部の破片であり、大きさは長さ1.8㎝・幅0.9㎝・厚さ0.2㎝・重さ0.24ｇとなっている。和良比遺跡の資料（長さ3㎝、幅1.6㎝、厚さ0.3㎝、重さ1.62g）はやや寸詰まりであり当該資料の中ではやや異彩を放っている。

**２）資料の評価**　今回の追加資料を加えれば、「向ノ原型五角形鏃」の関連遺跡は関東を中心に計37か所（42点）ということになる。撚糸文Ⅲ期の「花輪台型石鏃」の関連遺跡は、神奈川県を除く、関東一円と福島県に分布し、その分布域は南北約270km・東西約200kmに及ぶ。これに対して「向ノ原型五角形鏃」は比較的局所的であり、関東の西部主体（35遺跡・39点）で、茨城・栃木県の事例は皆無である。このような関東における遺跡分布は押型文土器の分布圏によく合致する。

## おわりにー今後の課題ー

雑駁ながら、薬師寺稲荷台遺跡と小倉丸山砦遺跡の資料をはじめとした新事実によりこれまでの成果を補強した。

冒頭にも記したように、今回の取り組みは、旧石器・縄文移行期の石器研究の一環である。その中で草創期後半の石器群は、石鏃にとどまらず、渡来石器（半月形石器、いわゆる「植刃」、棒状尖頭器、有溝砥石）に代表されるように多種多様である（橋本2015ａ・2015ｂ・2016ｃ・2017ａ・2018ｃ）。折しも、この頃は、「寒の戻り」であり、北方系集団の本州方面への南下を考慮しないわけにはいかない。このように、当時の石器群の多くが北回りのものであるだけに、関東・中部にとどまらず、さらに地域を広げて、北海道との対比が大きな課題となる。この点については、特に帯広市大正３遺跡の出土石器（「小型で薄身の尖頭器」、半月形石器（「両面調整石器」）、箆状石器は、東北地方を介して本州との強いつながりを感じさせる。今回は紙数の関係で見送らざるを得ないが、このテーマについては今後稿を改めて論じることとしたい。

このほか文中にも記したが、最近発見された北町低湿地遺跡は、途中経過ではあるがこの時期の遺物がほぼ出揃っており、今後の成果が期待される（長井ほか2019・2020）。この資料に関しても、しかるべき時期に改めて検討することとしたい。

**謝辞**　本稿を草するにあたり、以下の方々からご指導ご協力を賜りました。特に、遺物の実測や調査の成果の公表にあたって、高野安夫氏、下野市教育委員会、桐生市教育委員会、川崎市教育委員会、四街道市教育委員会からは特段のご配慮をいただきました。末筆ながら記して深甚の謝意を表します。

高野安夫、山口耕一、新井悟、山原敏朗、川端結花、長屋幸二、内川隆志、佐藤雅一、長井謙治、小熊博史、橋詰潤、前原豊、大工原豊、小菅将夫、澤田敦、南陽市教育委員会、小千谷市教育員会、津南町教育委員会（なじょもん）、市立市川考古博物館、長岡市立科学博物館、國學院大學博物館、栃木県埋蔵文化財センター、中津川市教育委員会、上松町教育委員会、千葉県教育委員会、下野市教育委員会、桐生市教育委員会、沼津市教育委員会、小美玉市教育委員会、帯広百年記念館、千葉県教育委員会、川崎市教育委員会・川崎市市民ミュージアム、藤沢市教育委員会、岐阜市歴史博物館、岐阜県博物館、笠間市教育委員会、桜川市教育委員会、阿見町教育委員会、新潟県立歴史博物館、長岡市立科学博物館、船橋市教育委員会（船橋市立郷土資料館）、四街道市教育委員会、大網白里市教育委員会（順不同・敬称略）。

**注**

１）先頃、新潟県立歴史博物館所蔵の壬遺跡の採集品（星野洋治氏コレクション）の中に小倉丸山砦例と同様の東北頁岩製の木葉形薄型尖頭器と黒色頁岩製の石錐が含まれていることに気がついた。おそらく、両者の間には地域を超えた深いつながりが存在したのであろう（宮尾2013）。

２）ちなみに、分布の外縁における下呂石製石器（旧石器時代～縄文草創期）の発見例は、日本海側では新潟県東蒲原郡阿賀町小瀬が沢洞窟の菱形鏃（及川2010）、同小千谷市真人原遺跡Ｄ地点の削片（橋詰ほか2011）、及び同中魚沼郡津南町本ノ木遺跡の尖頭器（橋本2018d）、太平洋側では千葉県千葉市六通神社南遺跡の大型尖頭器の一群（相京ほか2003）、静岡県沼津市井出丸山遺跡の二次加工ある剥片（高尾・原田2011）にとどまり今回の資料の希少性は高い。なお、下呂石原産地からの直線距離は小瀬が沢と六通神社南が約270㎞、真人原Ｄと南鍛冶山が約200㎞、屋敷田Ⅱと本ノ木が180㎞、井出丸山が約160㎞を測る。おおよその目安としてここに明記しておく。

３）関東では宮崎朝雄が、時期区分が可能な当該期の竪穴住居跡をⅠ期（井草Ⅰ～井草Ⅱ式）、Ⅱ期（夏島式～稲荷台式新・稲荷原式古）、Ⅲ期（稲荷原式新・大浦山Ⅰ式・花輪台Ⅰ式

～東山式・大浦山Ⅱ式・平坂式古・花輪台Ⅱ式）の３つの時期に区分している（宮崎2004）。これまでと同様に本稿でもこの見解を踏襲した。

**引用・参考文献**


相京邦彦ほか　2003『千葉東南部ニュータウン26　千葉市椎名神社遺跡・古城小弓遺跡・六通神社南遺跡』　千葉県文化財センター

秋元陽光　1985『大町遺跡』　上三川町教育委員会

安達桂祐・岡本郁栄　2009『元中子遺跡』　小千谷市教育委員会

石川義信・早川麗司　2007『向原遺跡　小組遺跡　上加賀田城跡』　茨城県教育財団

石坂茂・岩崎泰一　1988「撚糸紋土器文化における石器群の一様相」『研究紀要5』　pp.27-56　群馬県埋蔵文化財調査事業団

江原英・大野淳史　2012『県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査・工事立会概要報告書　平成21～23年度緊急雇用創出事業に係わる整理作業報告書』　栃木県教育委員会

荻澤太郎ほか　1995『東京外かく環状道路練馬地区関連遺跡第３分冊　もみじ山遺跡Ⅱ　縄文時代・弥生～古墳時代の遺構と遺物』　東京外かく環状道路練馬地区遺跡調査会

及川穣　2003「出現期石鏃の型式変遷と地域的展開－中部高地における黒耀石利用の視点から－」『黒耀石文化研究』２　pp.145-166　明治大学人文科学研究所。2005「第３節　五目牛新田遺跡出土の石器について」『五目牛新田遺跡　五目牛南組Ⅱ遺跡　五目牛清水田Ⅱ遺跡　柳田Ⅱ遺跡』　pp.253-257　伊勢崎市教育委員会。2006「出現期石鏃石器群をめぐる行為論－埼玉県滑川町打越遺跡出土石器群の分析から－」『考古学集刊』第2号　pp.1-22　明治大学文学部考古学研究室。2010「諏訪湖底曽根遺跡と黒耀石原産地をめぐる地域文化の形成過程」『信州黒曜石フォーラム2010　第20回長野県旧石器文化研究交流会　中部高地石材原産地と消費地をめぐる諸問題』　pp.8-9　信州黒曜石フォーラム実行委員会・長野県旧石器文化研究交流会。

小田静夫　1983「スタンプ形石器」『縄文文化の研究第7巻　道具と技術』　pp.149-163　雄山閣出版株式会社

利部修・谷地薫　1996『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ＸＸⅡ－岩瀬遺跡－』　秋田県教育委員会

加部二生・新井雅幸　2016「小倉丸山砦遺跡」『桐生市内遺跡発掘調査報告－平成25・26年度調査－』　pp.124-127　桐生市教育委員会事務局

北沢実ほか　2006『帯広・大正遺跡群２』　帯広市教育委員会

栗田功　2007『ナギ山遺跡２』　茨城県教育財団

紅村弘　1959『東海の先史遺跡』名古屋鉄道出版部　pp.144-145

国立歴史民俗博物館　2009『企画展示　縄文はいつから！？－１万５千年前になにがおこったのか－』

小玉秀成・本田信之　1999『館山遺跡』　玉里村教育委員会

小中美幸ほか　2015『小室台遺跡（１）』　船橋市教育委員会

小林修・日沖剛史　2004『横野地区遺跡群Ⅴ　三原田諏訪上遺跡Ⅰ』　赤城村教育委員会

小林達雄編　1987『壬遺跡1987』　國學院大學文学部考古学研究室

佐伯秀人・小笠原永隆　1992『－千葉県富津市－　前三舟台遺跡』　君津郡市文化財センター

桜井準也ほか　1994『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書第1巻　縄文時代草創期』　藤沢市教育委員会

佐藤雅一ほか　1995『屋敷田Ⅱ遺跡』　津南町教育委員会

鈴木素行ほか　2020「６．下高井遺跡第７次調査報告書」『令和元年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』pp.72-74　ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

篠崎譲治・田中美千代・和田哲　2004『七ツ塚遺跡14』　株式会社第三開発編　日野市東光寺上第１土地区画整理組合

高尾好之・原田雄紀　2011『井出丸山遺跡発掘調査報告書』　沼津市教育委員会

高谷英一ほか　1991『千葉県四街道市和良比遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　印旛郡市文化財センター

津野仁･塚本師也　2005『東谷･中島地区遺跡群６　磯岡遺跡（２～７区）』　とちぎ生涯学習文化財団

とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター　2009「復元された11,000年前の土器・薬師寺稲荷台遺跡（下野市）」『栃木県埋蔵文化財センターだより　2009　11月』　p.1

長井謙治ほか　2019「山形県南陽市北町遺跡の発掘調査（2018-19年度）」『第33回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』　pp.84-90。2020『北町遺跡　ドドメキ遺跡・新田前地点の調査』　愛知学院大学文学部考古学研究室

仲村浩一郎ほか　2004『辰海道遺跡１』　茨城県教育財団

中村渉　2012『下宿遺跡発掘調査報告書』　太田市教育委員会

中東耕志　1985「土器出現期における局部磨製石斧の一様相－群馬県境町神谷遺跡の石斧－」『群馬県立歴史博物館紀要』第６号　pp.23-50。1986「縄紋時代草創期における押圧・廻転縄紋土器の編年－群馬県佐波郡境町神谷遺跡の土器－」『群馬県立歴史博物館紀要』第７号　pp.23-44

西川博孝ほか　2019『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書15－柏市小山台遺跡Ｂ区　縄文時代以降編－』　千葉県教育振興財団

能代谷征則・浅田智晴　2014『鬼川辺（１）遺跡・鬼川辺（２）

遺跡・鬼川辺（３）遺跡』　青森県埋蔵文化財調査センター
萩谷千明ほか　2017『西鹿田中島遺跡発掘調査報告書(2)』　みどり市教育委員会
橋詰潤・岩瀬彬・小野昭　2011「新潟県真人原遺跡Ｄ地点出土石器群の報告（第1次調査）」『日本考古学』第31号　pp.55-66　日本考古学協会
橋本勝雄　2008a「縄文時代草創期の局部磨製石鏃について－関東の資料を中心として－」『芹沢長介先生追悼　考古･民族･歴史学論叢』　pp.293-305　芹沢長介先生追悼論文集刊行会。　2008b「「木葉形薄型尖頭器」雑考－縄文時代草創期における新たな器種の登場－」『石器に学ぶ』第10号　pp.123－138　石器に学ぶ会。2013「縄文時代草創期の局部磨製尖頭器－「木葉形薄型尖頭器」の再検討－」『旧石器考古学』78　pp.45-61　旧石器文化談話会。2014a「《研究ノート》木葉形薄型尖頭器の新例－その分布の広がり－」『研究連絡誌』第75号　pp.34-38　千葉県教育振興財団。2014b「本ノ木型尖頭器・木葉形薄型尖頭器、そして移行期の石器編年」『シンポジウム　時代の変革と石器の変遷－旧石器から縄文石器へ－　予稿集』　pp.56-67　岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会。2015a「移行期における東北頁岩製石器群の関東への南下」『斬新考古』第３号　pp.31-33　北海道考古学研究所。2015b「神津島産黒曜石製の両面加工石器－関東・中部における縄文時代草創期後半の石器研究－」『研究連絡誌』第76号　pp.10-22　千葉県教育振興財団。2016a「〈研究ノート〉柏北部東地区出土の旧石器・縄文時代の石器３例－木葉形薄型尖頭器・大型尖頭器・国府型ナイフ形石器の紹介と関連資料の検討－」『研究連絡誌』第77号　pp.1-9　千葉県教育振興財団。2016b「関東・中部における石鏃の出現とその系譜－縄文草創期から縄文早期前半まで－」『茨城県考古学協会誌』第28号　pp.1-40　　茨城県考古学協会。2017a「詳論・縄文草創期後半の両面加工石器群－「寒の戻り」と石器群の変化－」『千葉縄文研究』７　pp.31-53　千葉縄文研究会。2017b「神子柴型石斧の実像とその特質－関東の事例を中心として－」『茨城県考古学協会誌』第29号　pp.1-35　茨城県考古学協会。2017c「柏市小山台遺跡出土の旧石器・縄文時代の石器－本ノ木型尖頭器・木葉形薄型尖頭器・花輪台型五角形鏃の紹介と関連資料の検討－」『研究連絡誌』第78号　pp.1-12　千葉県教育振興財団。2018a「出現期の石鏃の特質とその意味」『千葉縄文研究』８　pp.29-58　千葉縄文研究会。2018b「神子柴型石斧の実像とその意味」『第20回長野県旧石器研究交流会/シンポジウム　神子柴系石器群とは何か』　pp.38-43　浅間縄文ミュージアム・長野県旧石器研究交流会・明治大学黒耀石研究センター・八ヶ岳旧石器研究グループ。2018c「「渡来石器」の時間的位置づけとその評価」『東北日本の旧石器研究』　pp.489-506　東北日本の旧石器文化を語る会。2018d「柏市小山台遺跡出土の旧石器・縄文時代の石器とその評価－国府系ナイフ形石器・上ゲ屋型彫刻刀形石器・本ノ木型尖頭器・出現期石鏃の紹介と関連資料の検討－」『研究連絡誌』第79号　pp.15-32　千葉県教育振興財団。2019a「神子柴型石斧への丹沢系緑色凝灰岩の使用とその背景－神子柴型石斧の研究（２）－」『千葉縄文研究』９　pp.1-19　千葉縄文研究会。2019b「神子柴型石斧の終焉と次世代の石斧の登場－神子柴型石斧の研究（3）－」『茨城県考古学協会誌』第31号　pp.21-50　茨城県考古学協会
橋本澄朗ほか　1979『薬師寺南遺跡』　栃木県教育委員会
八賀哲夫ほか　2002『上ヶ平Ⅱ』　岐阜県文化財保護センター
原雅信　1989『三室坊主林遺跡』　群馬県埋蔵文化財調査事業団
古川知明　2011「北陸の下呂石」『第4回下呂石シンポジウム　2011「旅する下呂石－思えば遠くへ行ったもんだー」資料集』　pp.19-40　下呂石シンポジウム実行委員会
村田文夫・増子章二　1978「川崎市多摩区黒川海道遺跡採集の石器群」『神奈川考古』第3号　pp.107-117　神奈川考古同人会
宮尾亨　2013『考古資料Ⅰ　星野洋治コレクション　新潟県立歴史博物館収蔵資料目録』　新潟県立歴史博物館
宮崎朝雄　2004「縄文早期撚糸文文化の竪穴住居について－関東地方における初期定住化－」『縄文時代』第15号　pp.1-32　縄文時代文化研究会
柳浦俊一ほか　2006『県道浜乃木湯町線（湯町工区）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（第１分冊）　松才遺跡・真野谷Ⅱ遺跡・半坂古墓群・宮ノ前遺跡・正源寺遺跡』　島根県教育委員会
山口直人　1989『千葉県大網白里市　宮台遺跡』　山武郡南部地区文化財センター
山口耕一　1999『多功南原遺跡（旧石器・縄文編）』　栃木県文化振興事業団　埋蔵文化財センター
若月省吾・小菅將夫・萩谷千明　2003『西鹿田中島遺跡発掘調査報告書(1)』　笠懸町教育委員会